The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	とりたて助辞の意味・機能と使用実態 ： 「など」を中心とした明治期と現代の比較研究
Author(s)	陳, 連冬
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49122
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【34】

氏　　名	陳（チン）　連（レン）　冬（トウ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６９７　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年３月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**とりたて助辞の意味・機能と使用実態－「など」を中心とした明治期と現代の比較研究－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　工藤眞由美 （副査） 准教授　渋谷　勝己　　教　授　田野村忠温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、とりたて助辞「など」「なんぞ」「なぞ」「なんか」「なんて」を取り上げ、文学作品から収集した実例に基づいて、明治期と現代（1980 年以降）の両時期における使用実態を調査し、各形式の意味・機能の違いを明らかにしたものである。本文 123 頁、400 字詰め原稿用紙換算 442 枚よりなる。

第１部の序論では、先行研究を精査した上で、従来の研究において手薄であった、とりたて助辞の意味・機能上の変化プロセスを明らかにすることが研究目的であると述べる。対象とする５つの形式に共通する意味用法として、「例示」と「否定的評価」をたて、「例示」の方は、同類のものごとの存在を示すものであり、「否定的評価」は、同類のものごとの存在を示さず、話し手の主観的（主体的）な評価を表わすものであると規定している。

第２部の第１章では、両時期において最も使用頻度の高い形式である「など」を取り上げ、構文的に、格助辞を伴うとともに肯定述語と共起する「例示」の用法は変化がないのに対して、格助辞を伴わず、かつ否定述語と共起する「否定的評価」の用法が現代になって激増したことを指摘する。第２章と第３章では、現代では使用頻度が低くなっている「なんぞ」「なぞ」を取り上げ、明治期においても作品ごとのばらつきがあることから、消滅の兆しが見られることを指摘する。第４章では、「なんか」を取り上げ、明治期には「否定的評価」の用法が中心であったが、現代においては「例示」の用法が増えてきていることから、「なぞ」「なんぞ」との交替があったのではないかと述べる。第５章では「なんて」を取り上げ、明治期においても現代においても「否定的評価」を表す用例が多く見られるが、構文的に、従属文に接続することが多かった明治期に対して、現代では名詞接続も増えてきていることを指摘する。

第３部では、小説の地の文と会話文のどちらで使用されるかという観点を含めて、第２部の記述を総合化する。第１に、小説の地の文では「など」が一貫して使用されているが、「否定的評価」の用法は現代の特徴であること、第２に、小説の会話文においては「否定的評価」の用法では両時期ともに「なんか」「なんて」が使用されるのに対して、「例示」の用法では「なんぞ」「なぞ」から「なんか」への交替が見られることを述べる。そして、小説以外の様々なジャンルからの用例を収集することによって文体的な観点に留意するとともに、明治期から現代に至る途中の段階を視野に入れて分析を精密にしなければならないことが今後の課題であるとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、小説という限られたジャンルに留まってはいるが、実例を丹念に収集し、量的、質的な観点からの共時的分析、ならびに明治期と現代（1980年以降）の使用実態の比較対照を行った労作である。

とりたて助辞の意味・機能の分析において、格助辞との共起の仕方に注目するだけでなく、文法的否定形式、語彙的否定形式、反語形式といった述語のタイプにも注目し、両者を相関的に考察することによって、明治期における使用実態と現代における使用実態の違いを明らかにした点が本論文の功績である。

惜しむらくは、事実の指摘に留まり、なぜそうなっているのかの説明が不足していると思われる。本論文のキーワードとなる「例示」は、その内容が明らかであるのに対して、「否定的評価」の方は、必ずしも規定が厳密であるとは言い難い。そもそもこのように単純に２分割しただけでよいのか、どちらにも入らない第３のカテゴリーをたてる必要はないのか、あるいは中間的あるいは複合的なケースについても徹底的な考察のメスを入れる必要がある。「否定的評価」用法において、同類のものごとの存在を示さないとする本論文の規定が正確なものであるかどうかについても、コンテクスト及び構文的スコープの厳密な分析を行うことによって、用例解釈における修正が求められよう。このような緻密な分析を進めることによって、単なる事案の指摘から、とりたて助辞において起こった変化プロセスを、客体的な側面と話し手の評価という主体的な側面からダイナミックに捉えることが可能になると判断される。

本論文は、このような未完成な部分を多く残してはいるが、部分的な用例だけに基づく安易な解釈を許さない興味深い事実を提示し、今後開拓していくべき沃野を提起した点で積極的評価が与えられるものとなっている。日本語において、名詞という品詞が文の中で機能する場合に、格助辞ととりたて助辞とがいかに相関するか、そして述語の極性とどのように関係するか、これらの点について、今後、斬新な理論的考察へと展開する可能性を有した論文であると判断した。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。